

市役所の夏

小説●地方自治

平栗鉄也

TETSUYA HIRAKIRI



市役所の夏

小説 ● 地方自治

平栗鉄也

TETSUYA HIRAGURI



ぎょうせい

出版部 東京 1972

著者・平栗鉄也（ひらぐりてつや）
昭和4年東京生れ。明治大学（政経）
卒。昭和29年から地方公務員。教育長
を最後に昭和59年に退職。現在、会社
役員。

〔著書〕ヨーロッパの残照。西ドイツ
ハイデルベルグ市の行財政制度の研
究。日日徘徊—或る教育長の日記。
お母さんと先生への手紙。

小説・地方自治 市役所の夏	定価 一五〇〇円（送料二五〇円） 昭和六十年十二月五日 初版発行	著者 平栗鉄也◎	発行所 株式会社 きょうせい 本社 東京都中央区銀座七の四の二二 営業所 東京都新宿区西五軒町五二 郵便番号 一六二 電話 〇三（二六八）二一四一（大代表） 振替口座 東京四一一〇〇〇〇番	検印省略 乱丁本・落丁本はおとりかえいたしません。 印刷（株）行政学会印刷所（S）製本（株）大口製本印刷
------------------	-------------------------------------	----------	---	--

ISBN-324-00229-0
(5101985-00-000)

市役所の夏——目次

雪	百	新	反	手	黄	退	雨	潮	発
化	家	し	転	練		職	台		
	争	い	攻	手					
粧	鳴	波	勢	管	昏	金	風	騒	端

140	126	109	97	78	62	49	34	21	7
-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	---

市	初	長	住	敗	花	春	潜	破
役			民		吹	の		
所	舞	い	自					
の								
夏	台	坂	治	戦	雪	嵐	行	滅

255	240	225	210	198	189	176	163	149
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

市役所の夏

これはフィクションである。ここに登場する人物や団体や事件はすべて著者の創作によるものであるが、しかし何処の市役所にもありふれた現実の営みを描いたつもりである。

「地方の時代」と言われて既に久しいが、地域の住民にとって一番身近な市町村行政すら、依然として紗（うすけ）のカ―テンに覆われた部分が多い。

この小説を通して、いささかでも「地方自治」を考えきっかけにしていたければ幸いである。

発
端

由利江市議會は開会四日目を迎えていた。午後の日射しが議長席まで伸びてくると、議場内にむし暑い空気が満ちてくる。

午後一時から再開された議事はだれも放しだった。市長提案の議案十九件を夕方までに片付ける——その後で片野市長の後援会に駆けつける——そういった腹づもりの議長は機械的に議事進行表を読み上げていた。

「日程第六 議案第五十五号 由利江市非常勤特別職職員の報酬および費用弁償条例の一部を改正する条例。これより本件を議題といたします。質疑あわせて討論をお願いします」

「……………」

「ございませんか……。それでは質疑・討論を終わり採決いたします。議案第五十五号

は原案のとおり決することに異議ありませんか」

「異議なし」

「ご異議なしと認めます、よって本件はさよう決しました。つぎ、日程第七 議案第五十六号 由利江市国民健康保険条例の一部を改正する条例。本件を議題といたします。これより質疑あわせて討論を願います……」

議事は淡々と進んだ。というよりも、けだるい流れ作業に飽きた人たちは思い思いのポーズで席を温めているにすぎない。早口でまくしたてる議長に応えて「異議なし」を連発する進行係は一年生議員、議場の前列で所在なげに議案集を繰っている。先輩ほど後列に座るが、議案に目を落とす者はいない。

大ボスの三田は深々と体を沈め、背もたれに頭を乗せたまま冥目している。野党のうるさ方、早瀬はさっきから議場を出たり入ったりしている。その度に六法全書や資料など抱えこんでくるので、入口に近い総務部長の野田だけは何やらいやな予感がしていた。

野次専門の清田は出番のない無聊ぶりようさを持て余し、盛んに隣の木山とささやき合っている。

る。

居眠りする者、肘枕で議長席を見上げる者、雑誌に見入ったりで、どうやら議事に参加しているのは半数にも満たないようだった。

理事者側も同様だが、こちらはお行儀がいい。

市長、助役などの三役や、部長クラスの居並ぶヒナ段は議席と向かい合っているから慎ましい態度こそ崩さないが、もうヤマは越えたという安堵感はみなぎっていた。次々に上程される議案の担当部長は、所管の議案が可決されると安堵の吐息をもらし、後は知らぬ顔の半兵衛を決めこむ。

議案審議の時の質問はあまり無いのが通例だし、とくに今回の市長提出議案は単純な事務的案ばかりだったから、問題になるような要素はなかった。議場には倦怠感が流れ、議長のカン高い声だけが淀みなく続いていた。

由利江市議會は昭和五十七年九月九日から始まった。初日と二日目、市政に関する一般質問にあてられる。今回の質問者は十七人——このやりとりは議會報にも掲載されるし、議會活動のPRにもなるから議員にとっては正念場だ。開会十日前ほどから資料

集めに庁内を渡り歩く。選挙で世話になった支持者から、苦情や陳情の注文取りをする。どぶ板議員といわれないためにも、演説の前文には知性と教養のきらめく論調が必要だ。つまり全体を格調高いトーンでまとめながら、ひとつひとつの要求をちりばめていく工夫が大切だから専門書を流し読む。

新聞から時の話題を取り上げることも欠かせない——そうやって質問原稿を練りあげるのである。

一方、理事者側でも万全のシフトで備える。

質問の趣旨はほぼ五日前に通告されるから、関係の部課長は答弁の資料作りに精を出す。質問者を追いかけて取材する。これが不充分だと本会議で立往生することになるから血眼で走り廻る。三日前になると市長を中心にも部長連の打ち合わせがあつて、答弁者の割当て、答弁内容の確認を済ませる。

だから議会幕開きの二日間は、攻守それぞれに気骨の折れる長い一日が続くのだつた。

三日目は議案上程。今度は条例の改正が二十二件、人事案件二件、補正予算三件が市

長から送られている。これを一括して議題にのせ、市長から趣旨説明をするだけだから至って気楽である。この頃から議場は急速にだれ始めるのが常だった。

四日目の今日はその議案審議にあたるのだが、補正予算案と、問題を抱える条例案三件は総務委員会に付託されることになっているので、残りの議案は軽いものばかりだ。しらけた空気の中で議事は流れ作業のようにはかどった。議長は快調な運営に満足だった。舌で唇を湿らせて進行表の最後を読み上げる。

「日程第二十五 議案第七十七号 由利江市職員定数条例の一部を改正する条例。これより本件を議題といたします。質疑あわせて討論を願います……」

「それでは……」

そう言いかけた時だった、突然野太い声があがった。

「議長ーッ！」

議長はうろたえた眼を泳がせたが、まだ機嫌の良い指名の声を張り上げた。

「十八番・奥田一五郎君」

奥田はモソモソと立ち上がったが、冴えない風采はどうにも迫力がなかった。

「ひとつお聞きしますが、この議案は福祉事務所のケースワーカー三人を増員するというものですね。このなかみには勿論賛成です。反対はしないけどね……」

ここで彼は言い淀んだ。一瞬、視線を上げた議員たちはここで拍子抜けして元へ戻る。

「何だ！ どうした！」

気合をかける清田にもハリはない。

「困っている人の面倒をみる生活保護の仕事は大切です。対象になる世帯がふえてきたから手が足りない、行き届いた措置ができないという提案説明は良くわかる。しかしですよ、今世間では行政改革が叫ばれ、職員の数や給与にはたいへん神経質になっているところですよ……」

「だからどうした！」「簡単々々」

あちこちから野次が飛ぶ。みんな退屈を持て余していたところだからニヤニヤしている。

「だから本当に手が足りなければそれでいいんだ。真面目にやってるんならそれでい

い。如何ですか」

議長は挙手した厚生部長の黒瀬を指名する。

「お答えします。ご提案の際ご説明したとおり本年五月から八月にかけて生活保護世帯が急増いたしました。これはご承知の通り室屋地区に建設された特営住宅の入居世帯に対象者が多かったのが原因でございます。およそ百件ほどのケースが増えるわけですから、現員をどう遣り繰りしても三人をお認め願わないと国の基準に達しません。そうなりますと国からの負担金、あるいは各種の補助にも影響してまいりますのでぜひご理解を賜りたいと思います」

さすがに手慣れた答弁で立て板に水の感があつた。だから奥田がのっそり二度目の手を挙げた時、議長は露骨に眉をしかめた。

「だから賛成だと言ってるんです。しかしながら、本業で忙しいんならわかるんです。本務以外のことにまで手を出して、それで忙しいは通リませんよというんです。半月程前、保護係の方でそんな騒ぎがあつたようですがどうなんですか……」

議場のみんながオヤツという具合に奥田を見上げる。このへんから厚生部長が取り

乱してきた。

「え——。あの件は極めて個人的な問題でありまして……。公務とは何ら関係のないものですから従ってこの議案とはまったく別のことでありますのでご容赦願います……」
消え入るような語尾だったから尚更みんなの好奇心に火をつけたようだった。

「何だ！」「ハッキリしろ！ 何があつたんだ！」騒然としてくる中で、顔色をかえた黒瀬が市長の耳許にささやきかけている。

「そんな所で内緒話をするな！」

清田のイキイキした声が飛び出す。そんな雰囲気を感じた議長が、じれったそうに理事者席を促すと黒瀬は不承不承に立ち上がった。

「実は庁内で勤務時間中にトラブルがありましたので、この機会にご報告申し上げます。八月の半ばですが、福祉事務所の事務室で保護係長と面談しておりましたご婦人が突然、カミソリのようなもので危害を加えようとしたので周りの者が取り押さえたという事故がございました」

奥田はまた立ち上がった。